

2009年度心と体の相談センター調査・研究事業
未成年者のお酒に関する調査報告書

2010年3月

島根県立心と体の相談センター

はじめに

お酒に含まれるアルコールには、高血圧症、動脈硬化症、肝硬変などといった体への悪影響や、脳細胞の減少・萎縮といった脳への影響から生じる不眠や不安感情の生起、摂取し続けることにより強くなる依存性など、様々な危険のあることが知られています。このような心身に及ぼす害については、成長期にある未成年者ではより顕著で急激に現れることも報告されており、ことに、成人男性では飲酒の開始から15～20年で発症すると言われるアルコール依存症に関しては、未成年者ではわずか数ヵ月から2年で発症するとも言われています。

これまでに中・高生を対象として実施されたいくつかの調査結果からは、アルコールが心身にどのような害を及ぼすかについて、中・高生はある程度の知識を持っていることが示されていました。ところが中・高生の飲酒実態を見ると、習慣的に飲酒していると思われる者がかなり高い割合で認められ、安易にアルコール飲料に近づいている様子をうかがうことができます。

こうした実態を踏まえ、得られた知見を活かした未成年者に対するアルコール教育や啓発活動が多く関係機関で取り組まれてきています。

また、酒販組合が自主的な取組として実施する、アルコール飲料の自動販売機の屋外設置の自粛や、小売店等における対面販売時の年齢確認の取組など、未成年者の容易なアルコール飲料の入手を防止する仕組み等も整ってきていると言えます。

このような、アルコール教育などによる知識の普及や啓発、さらには販売方法の工夫といった社会的取組により、未成年者の飲酒傾向、アルコール飲料や飲酒に関する意識は、今回と同様の方法で我々が調査を実施した5年前から変化してきていることが予想されました。それは、今回、このアンケート調査を共同で行った社団法人島根県断酒新生会、山陰嗜癖行動研究会と当所の三者が、アルコール関連問題の事業の一つとして実施しているアルコール教育（アルコール学校セミナー）を受講した高校生の様子からもうかがうことができます。断酒会会員による体験発表や依存症についての講義を聴いた高校生の反応はたいへん素晴らしく、アルコールの特性や飲酒による心身への影響、とりわけアルコール依存症に対する理解の深まりは目を見張るものがあります。

未成年者に対する正しいアルコール教育の必要性とその効果は疑う余地はないものと思われます。主に5年前の調査結果との比較から、現在の中・高生の飲酒傾向等について明らかにしようとした今回のアンケート調査結果が、未成年者に対する今後のアルコール教育にとって有益なものとなるよう願っています。

2010年3月

島根県立心と体の相談センター
所長 永岡秀之

目 次

I. 調査目的	1
II. 調査概要	1
1. 調査地域	
2. 調査対象	
3. 調査対象校	
4. 調査内容	
5. 調査方法	
6. 調査時期	
III. 調査結果	2
1. 飲酒経験率	
2. 初めての飲酒の状況	
3. 飲酒の現状	
4. 飲酒と問題意識	
5. お酒の害についての認識	
IV. 考 察	5
V. 資 料	8

I. 調査目的

2004年度に島根県立精神保健福祉センターが実施した「未成年者のお酒に関するアンケート調査」では、飲酒経験のある生徒が中学1年生で72%、中学3年生で76%、高校2年生で87%の割合を占めており、その中で1ヶ月に1回以上飲酒をする生徒の割合が中学1年生で23%、中学2年生で36%、高校2年生で40%という結果が報告されている。

未成年者の飲酒は将来に渡って心身に重大な害を及ぼす危険性があることから、島根県内でも関係機関が様々な機会を通じて未成年者の飲酒予防にとりくんできたが、前調査から5年を経過した現在の中・高生の飲酒に関する実態を把握し、その傾向を知り考察を加えることで今後の未成年者に対する効果的なアルコール教育や啓発のあり方を検討する材料とするため、本調査を実施した。

II. 調査概要

1. 調査地域

島根県全域

2. 調査対象

調査は島根県内の中学1年生 1,199名、中学3年生 1,263名、高校2年生 1,417名に対し実施した。

回答者数は、中学1年生 1,152名、3年生 1,184名、高校2年生 1,314名のうち有効回答者数は、中学1年生 1,124名、中学3年生 1,168名、高校2年生 1,277名であった。

3. 調査内容

中・高生本人の飲酒実態や飲酒行動に関連する要因や環境、またアルコールに関する意識と知識等について25個の設問を設定した。回答は準備された選択肢の番号を回答用紙に記入する形式とした。(一部記述式あり)

4. 調査方法

アンケート調査票と回収に必要な封筒を調査対象校に配布し、回答用紙の記入は学校において行う。回答終了後、調査票は生徒自身が封筒に入れて密封する。生徒から回収した封筒は各学校ごとにとりまとめ、心と体の相談センターへ送付された。

5. 調査時期

平成21年9月

Ⅲ. 調査結果

1. 飲酒経験率

飲酒経験率は、中1で47.3% 中3で57.8% 高2で65.9%で、いずれも男子が女子を若干上回っている。

5年前の調査結果と比較すると、中1（▲24.8）中3（▲18.0）高2（▲21.2）のどの学年も飲酒経験率は大幅に減少している。しかし、中学生の時期に飲酒経験のある生徒は半数を超え、年代が上がるに連れて増え続ける傾向は変わらない。

生徒自身の成長に伴う心身特徴と周辺環境の要因が関連しあっていることが窺える。

2. 初めての飲酒の状況

① 時期

飲酒経験者のうち、初飲酒の時期が小学生である者は53.9%で過半数を占める。この結果は5年前とほぼ同じである。同じく中学生である者は15.5%、高校生である者2.4%であった。

覚えていないとする者が26.9%あるが、飲酒が記憶に残らない程度のものであったか低年齢の時期であったと考えられ、小学生以下での初飲酒は実際にはもう少し多い可能性がある。

② 初飲酒を勧めた人との関係

飲酒経験者のうち、初めての飲酒を勧めた人との関係では「自ら進んで」が最も多く全体の3割近くを占めている。また、どの年代も女子が男子より割合が高いことが特徴であり平均7.8%の男女差が見られる。5年前に比して男子ではその割合はほぼ横ばいであるのに対し、女子のみを見ると+4.4ポイントとなっており、女子が自ら進んで飲酒をする傾向が進んでいることが窺える。

次に「親から」「親戚から」の割合が高く、合わせて3割を占めている。両者とも、どの年代も女子より男子の割合が高いことが特徴である。生徒の身近にいる大人が、男子に酒を勧める傾向があると思われる。また「覚えていない」(25.1%)は記憶に残らない年少期であったためと考えることができ、年少期であれば身近な大人から勧められた可能性が高く、「親から」「親戚から」の割合は若干上がると考えられる。

③ 初飲酒の理由

飲酒経験者のうち、初飲酒の理由は「おいしそうだった」が平均39.9%「面白そうだった」が平均10.2%で、半数が好奇心によるものである。「おいしそう」は女子が男子より平均10.0ポイント上回っているのも特徴である。

「清涼飲料水（ジュース）と間違えた」は「おいしそうだった」に次いで多く学年

が低いほど割合が高くなる傾向である。5年前比で平均して+5.7ポイントとなり、アルコール飲料のパッケージやデザイン、また味も清涼飲料水と区別がつきにくいのが増えてきていることが窺える。

「人に勧められて断ることができなかった」は5年前と比して平均▲2.0ポイントとなっているが、年代が高くなるにつれて割合が高くなることから、未成年の飲酒に対する周囲の認識との関係も影響していると思われる。

3. 飲酒の現状

① 飲酒の機会と相手

飲酒機会は「冠婚葬祭」が最も多く飲酒経験のある者のうち7割が挙げており、5年前比でも平均+7.8ポイントとなっている。次いで「家族が飲むときに一緒に」は平均5割が経験している。このことは、最もよく飲酒する相手として「親や親戚」が全体の約7割を占め最も多い割合であることと関連している。飲酒相手が「親や親戚」である割合は5年前と比してどの学年も増加しており、特に高2では+14.0ポイントとなっている。

「誰かの部屋で仲間と一緒に」は5年前比では全ての学年において減少しているが、高2で2割が経験し中学時代と比して圧倒的に増え、また男子より女子の割合が高いのが特徴である。「クラス会やコンパ」「居酒屋等で仲間と」なども5年前に比して減少しており、飲酒相手が「同学年の友だち」の割合も5年前比で各学年とも減少していることから、同年代の仲間と飲酒する機会は総じて減っていることが窺える。

「一人で飲んだことがある」は平均1割強の者が経験しており、5年前と比して中3高2は割合が減少しているが、中1では約+2ポイントで特に女子のみを見ると約+5ポイントとなっている。「一人で」飲むことが最も多いとする者の割合も1割を占め5年前と比してどの年代も増加傾向にあるが、飲酒理由との関連をみると「おいしいから」が最も多く、初飲酒動機と継続飲酒理由の関連がみられる。

② 飲酒の頻度と量

飲酒頻度は「年に1～2回」がどの年代も最も多い。しかし、飲酒経験者のうち月に1回以上飲酒する者が中1で11.7%、中3で18.3%、高2で28.3%あり、そのうちの半数が週に1回以上の飲酒をしていると回答している。

1回の飲酒量は、コップ1杯未満が最も多いが、学年が上がるに連れて1回の飲酒量も多くなる傾向が見られる。コップに3杯以上飲む者が全体の19.5%と約2割を占めている実態がある。

飲酒頻度と1回の飲酒量の関連をみてみると、飲酒頻度と飲酒量は比例する傾向があり、年に1～2回とする者の飲酒量はコップ1杯未満が中学生で75.7%、高校生で66.8%で最も多いが、月に1回以上飲酒する者のうち1回の飲酒量がコップ1杯未満

は中学生 40.2%、高校生 14.7%と激減すると共に、コップ 1 杯は中学生 28.6%、高校生 26.0%、コップ 2 杯は中学生 15.9%、高校生 20.3%、コップ 3～5 杯は中学生 11.4%、高校生 24.9%で1回の飲酒量も多く、特に高校生の1回の飲酒量が多いことが窺える。

また、1回にコップ 6 杯以上とする大量飲酒者の割合が、月に 1 回以上の飲酒者のうち中学生 3.8%、高校生 5.1%ある。そのうち週に 2～3 回の頻度での飲酒者が中学生 60.0%、高校生 33.3%、また週に 4 回以上の飲酒者が中学生 20.0%、高校生 44.4%もあり、アルコール依存症などの問題飲酒に発展している可能性が否定できない。

③ よく飲酒する酒の種類

よく飲む酒の種類は、どの年代も「サワーや果物味のお酒」が最も多く、男子より女子が好んで飲んでいる傾向がある。次いで「ビール」「日本酒」でどの年代も女子より男子の割合が高い。飲酒頻度が多くなってくると、「ビール」「日本酒」「焼酎」などの占める割合も上がる傾向があり、成人に近い飲酒内容になっていると考えられる。

④ 飲酒の理由

飲酒理由はどの年代も「おいしいから」が最も多い。5年前比で中 1 で+1.6、中 3 で+7.6、高 2 で+5.6 ポイントとなっており、女子が男子より比率が高い。次いで「親や親戚に勧められる」となっており、5年前比で中 1 で▲1.4、中 3 で+0.8、高 2 で+5.9 ポイントでいずれも男子が女子より割合が高い。

4. 飲酒と問題意識

飲酒についての問題意識については「特に問題とっていない」「コントロールできるしいつでもやめられる」とする者がほとんどである。

飲酒頻度との関連をみると、飲酒頻度が月に 1 回以上と高い者のうち「問題なし」「コントロールできる」と考えている者が、中学生 61.5%、高校生 56.0%もある。「しばしば悩む」「コントロールには誰かの助けが必要」「専門家のアドバイスを受けたい」のように何らかの問題意識を持っているものは合わせて中学生 7.7%、高校生 14.9%で、飲酒頻度が高くても問題意識は薄いことが窺われる。

飲酒量との関連をみても、1回の飲酒でコップ 3～5 杯飲む者のうち「問題なし」と考える者はいなかったが、「コントロールできる」が中学生 50.0%、高校生 45.1%あった。「しばしば悩む」などの問題意識をもっている者は中学生 20.0%、高校生 14.6%であった。6 杯以上とする者の中でも「問題なし」とする者が高校生で 7.1%あり、「コントロールできる」が中学生 80.0%、高校生 78.6%であった。何らかの問題意識がある者は中学生 0.0%、高校生 7.1%という結果になっており、飲酒量に対する危機意識の薄さも窺われる。

5. お酒の害についての認識

飲酒が身体に及ぼす害について「害がある」とした者が平均 57.2%であった。5年前比で中1 (+12.5)、中3 (+4.0)、高2 (+4.9) の全学年で高くなっており、お酒には身体に悪い影響があるとの認識を持つ者が増えた。これは、学校でお酒が健康に及ぼす影響についての学習経験が「ある」とする者(平均 70.8%)が、5年前比で中1 (+21.1)、中3 (+9.7)、高2 (+6.5) 全ての学年で高くなっていることから、学習による効果だと考えられる。

飲酒の害に関する認識については、全体の正答率と誤答率を比べると正答率が高いが、5年前比では、正答である「アルコール中毒になる」(▲1.8)、「脳がちぢむ」(▲4.8) は低くなっている。また、誤答である「肺がんになる」(+11.4)、「インフルエンザになる」(+4.1)、「関係ない」(+0.1) で誤答率が上がっているのも特徴である。「わからない」と回答した者も全体の1割を超えており、5年前比でも+2.6ポイントとなっている。

学習の機会が増えて、アルコールには身体への害があるという認識は広まりつつあるものの、内容についての正しい知識の習得が伴っているかどうかは疑問である。

IV. 考察

今回の調査結果及び5年前に実施した調査結果との比較から、県内の中・高生の飲酒の実態と傾向が浮かびあがってきている。

それは、「中・高生は、お酒には自分たちの身体に悪い影響があるらしいと知ってはいるが、お酒に対し「おいしそう」「面白そう」という強い好奇心を持ち、好奇心を後押しするように親や親戚から冠婚葬祭等に飲酒を勧められたのを機に「自ら進んで」飲酒を経験し、その経験からお酒は「おいしい」モノだと認識をし、継続して飲酒をするようになる。中・高生にとって「おいしい」お酒は「サワーや果物味のお酒」であり、家庭で親も一緒になって、このくらいならたいしたことはないだろうと軽い感覚で飲んでいる。友達同士で集まるのが好きな思春期の女子は、友達と一緒にノリで飲む機会も多い。男子は、親を始め身近な大人から、学年が上がって身体も成長するにつれて「これくらい」と勧められがちで、本人もその気になって飲酒する。飲酒を継続するうちに身体に耐性ができ、頻度や量が増していく」こんな姿が見えてくる。

上記のような状況において、「本人」「親」「社会」の三者に見られる問題点が考えられる。

「本人」の問題は、飲酒の害についての正しい知識がないこと、感情を抑制する理性が未熟なことである。

「親」の問題は、飲酒の害についての正しい知識がないこと、未成年の飲酒の危険性

について認識が甘いこと、未成年の子に対する飲酒予防についての教育力が不足していることである。

「社会」の問題は、未成年にお酒を身近に感じさせ好奇心を持たせる環境づくりをしている面があることである。特に、サワー系の酒類に関しては、外装デザインが清涼飲料水と区別がし難いカラフルで軽いイメージを持たせる物が多数出回り、味も果物味やカルピス味など子どもにもなじみのある味つけがされていることが表記されている。テレビでは中・高生がテレビを観る時間帯にも、中・高生もよく知っている若く人気のある女性タレントがサワーを美味しそうに飲む宣伝が流されている。コンビニエンスストアでは清涼飲料水の隣に、同じような外観の様々なサワー類が陳列されている。このような環境で中・高生が「サワーを飲んでみたい」と思うのは好奇心旺盛で大人にあこがれる年代である由、自然なことと言えるかもしれない。反面、未成年の飲酒予防のために社会的規制がかけられ取組みがなされてきている効果も、酒を手に入れる方法や飲酒場面等の結果からは窺い知ることができる。

以上の点から、酒害に対する正しい知識を持たない中・高生は、サワー系の酒類を入り口として飲酒を経験し易い家庭や社会環境に置かれていると言え、今後の未成年者に対するアルコール教育や啓発のあり方を検討していく上においては、「親」など身近な大人の現状や社会的状況を踏まえながら、「未成年者本人」に対する効果的な手段や内容を工夫する必要がある。

最も必要なことは、未成年者が早い時期に「飲酒の害」についての正しい知識を習得する機会を多く設けることであろう。

今回の調査結果からは、アルコールが身体に及ぼす影響についての学習経験は増加しているもののそれが正しい知識の習得につながっていない面があることが窺われた。また、学年が上がるにつれて飲酒経験を積み重ね、次第に飲酒頻度や飲酒量も増える傾向があるが、総じて飲酒に対する問題意識は希薄であることがわかった。

したがって、飲酒経験が無いか浅い時期に「飲酒の害」についての正しい知識をしっかり習得させることが大切であると言える。それにより、アルコールに対する危機意識を芽生えさせ、好奇心や大人の勧誘に負けず自らの心身を飲酒の害から守る動機付けとすることができ、未成年者の飲酒予防に大きな効果を発揮することが期待できる。

また、未成年者がアルコールに関する正しい知識と飲酒に対する問題意識を持ち、正しく行動に表すことができれば、家庭における親等の身近な大人の意識変革にもつながることが期待される。

学習内容についても記憶と印象に残る工夫が求められる。必要かつ正しい知識を、中高生が理解をし易い内容で、身近にある危険をイメージできる手段や材料を選定することを心がけたい。

心身の発達途上にある未成年者の飲酒は、一生を左右するほどの重大な悪影響を及ぼす高い危険性がある。適切な時期に適切なアルコール教育を行うことが、その後の人生を心身ともに健康で豊かなものにする一助になり、そのことが後輩達の生きた良き手本となることを信じて、これからも関係者はそれぞれの立場での取組みを進めたいものである。

未成年者のお酒に関する報告書
発行 2010年3月
島根県立心と体の相談センター
松江市東津田町1741-3